

校本『島陰漁唱』（一）

高津 孝・岩川拓夫

本稿は、薩南学派の祖、桂庵玄樹（一四二七—一五〇八）の詩集『島陰漁唱』の校訂本である。これまで、桂庵玄樹の詩集としては、続群書類従所収本が『島陰漁唱』として利用されてきたが、群書類従本より所収詩歌数の多い東京大学史料編纂所所蔵『島陰漁唱』（附載文書に慶長四年（一五九九）の年号）も早くから注目されていた。しかしながら、史料編纂所本は、火災によってテキストの下部が失われた不全本であり、その利用には問題があった。今回、渡邊雄二（福岡市美術館）、伊藤幸司（山口県立大学）両先生のご好意により、史料編纂所本と系統を同じくする旧知覧文庫本の複写を入手することができた。本稿では、欠損のない旧知覧文庫本を底本とすることにした。『島陰漁唱』写本については、公私図書館のご協力により、可能な限り収集に努め、以下の五本を揃えることができた。

写本

1. 東京大学史料編纂所本 外題「嶋陰集」、序題「島陰集」、内題「嶋陰漁唱」。一冊二卷（上・中）。半葉十行二十一字。返り点、送り仮名、縦点、朱引あり。全冊に渡って、本文毎行下部一字から六字が失われている不全本である。本文筆跡は、全体として線が細く、横線が極端な右上がりの傾向を見せるものと、巻之中的最初葉（六十七丁表）から九十八丁裏までの文字が太めで、比較的平坦な横線を有するものと二種を区別できる。収録詩歌数は現存写本中最

も多く、文明八年丙申（一四七六）から、明応六年丁巳（一四九七）までの二十二年間の詩歌を収め、かつ、巻末には、これまで『漢学紀源』に引用されて知られるのみであった、中国四明の著名な人士の贈詩および贈詩序を収める。巻末には、慶長四年（一五九九）の年号を有する文書を付する。以下、翻字。

奉經始□□□□□來大和尚 迦葉阿難二尊者寶座。伏以、近年以來、雖有欲經營佛座之志、而以乏資財不能改作。爰有宗嘉禪人、喜捨貨賄、特抽旨趣、即命梓匠。秀宣公、經之營之、不日成之。於是、我願既滿、衆望亦足。所冀、安座之後、宴坐極喜之地、不動不傾。經營保安之場、無摧無敗。□□荒廢之患、益肇興隆之基。常樂常安、至祝至禱。

慶長第四己亥年臘月十三日

見正興小比丘玄龍謹誌。

雲叔叟（花押）

附載文書は、一葉表に文書、一葉裏の最終行下段に「雲叔叟（花押）」と記す。また、附載文書は、『鳥陰漁唱』に関連した内容を記すものではない。したがって、附載文書は、伝来の過程で本冊に綴じ込まれたものと考えられ、本集とは直接関連性を有するものではない。本書には、「神戸 桐月社梓」と版心に記した野紙が付されており、「大隅正興寺、建仁寺ノ末寺。右寺ノ三十九世桂庵玄樹和尚、永正五年六月五日八十二歳ニテ永寂。四十世ハ雲叔玄龍ト云。此人桂庵ノ法嗣ノ人ニテ跋ヲ書タルナラン。見正興トアルヲ以テ知ルベシ。此集ハ詳ナラズ。寺ハ代々嶋津家ノ祈願寺ト称セリ。梧庵誌」とある。梧庵（一八一五—一八九二）は、建仁寺清住院の僧で、名は紹材、字は鄧林、別号慨

狂子である⁽¹⁾。梧庵の考証によれば、附載文書は、大隅正興寺⁽²⁾の第四十世住持雲叔玄龍によるもので、雲叔玄龍の前代住職が桂庵玄樹となる。しかしながら、玄龍と桂庵玄樹の年代は九十年ほど離れており、桂庵玄樹を大隅正興寺三十九世住職で玄龍の前代住職とすることは根拠に乏しい。天正年間、大隅正興寺の住職が玄龍であったことは、『上井覚兼日記』⁽³⁾より確認できる。附載文書と本書には何らかの関係を推定できることから、本集は大隅正興寺に伝来したものと推定される。

本書にのみ残る注記に、しばしば、「文集」に言及しており、別個に文集が存在したことは確実である。

2.

旧知覧文庫本 外題「寫陰漁唱」、序題「島陰集」、内題「島陰漁唱」。二冊(乾・坤)二卷(上・中)。半葉九行二十一字。印記「其中百品」「佐名文庫」「知覧文庫」。本書の「知覧文庫」印は、『知覧町郷土誌』⁽⁴⁾掲載の「知覧文庫」印と一致し、第十八代知覧領主島津久峰(一七三二・一七七二)の旧蔵書であったことが判明する。知覧文庫は、島津久峰の旧蔵書を、その子久邦が知覧の地に移し、知覧文庫の朱印を押印して、郷校である胥僚館に保管したものである。しかし、維新前後の騒乱及び管理の不備、明治二十九年の火災のため、そのほとんどを失うことになった。昭和十年十月、昭和天皇の鹿兒島行幸の折り、造士館で開催された薩藩史料天覧に際し、知覧文庫本『島陰漁唱』二冊(島津久峰写本)が展示されたが、これは京都の其中堂から借用したものである⁽⁵⁾。印記から、本書がこのテキストであると判断される。東京大学史料編纂所本と同系統の写本であるが、巻末の贈詩序、贈詩を欠く。現在、泉岳寺(東京都港区)所蔵⁽⁶⁾。

3.

大阪大学附属図書館懷徳堂文庫本 外題「嶋隱漁唱」、序題「島隱集」、内題「嶋隱漁唱」。一冊三卷(上中下)、『島隱雜著』一卷と合編。半葉十二行二十字。頭注有り。印記「碩園記念文庫」。西村天因(本名時彦(ときつね)、号碩園、一八六五—一九二四)旧蔵書であり、大正十四年に懷徳堂に移管された『小天地閣叢書』乾集所収本である。『小

『天地閣叢書』は、西村天因によって纏められた文献善本の写本叢書で、乾集・坤集計百四十三冊である。本テキストは、続群書類従本と同系統の写本で、文明八年丙申（一四七六）から、明応四年乙卯（一四九五）までの二十年間の詩歌を収め、巻末の贈詩序、贈詩を欠く。巻上の巻頭「嶋隠漁唱卷之上」下に割注「自文明八丙申年至安永三甲午年已二百九十九年」があり、安永三年（一七七四）の写本に基づくと考えられる。

4. 神宮文庫本 外題「島隠漁唱」、序題「寫隱集」、内題「寫隱漁唱」「嶋隠漁唱」。三冊三卷（上中下）。半葉十二行十六字、十行二十字（上卷三十六裏以降）。印記「林崎文庫」「林崎文庫」「天明四年甲辰八月吉旦奉納 皇太神宮林崎文庫以期不朽 京都勤思堂村井古巖敬義拜」。天明四年（一七八四）奉納。続群書類従本と同系統の写本で、文明八年丙申（一四七六）から、明応四年乙卯（一四九五）までの二十年間の詩歌を収め、巻末の贈詩序、贈詩を欠く。

5. 国立公文書館旧内閣文庫本 外題「島隠漁唱」、序題「嶋隠集」、内題「島隠漁唱」。三冊三卷（上中下）。半葉八行二十字。返り点、送り仮名、縦点あり。印記「林氏蔵書」「浅草文庫」「昌平坂学問所」「内閣文庫」「日本政府図書」。「林氏蔵書」は、林述斎（一七六八・一八四二）の印で、『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』⁷によれば、寛政九年（一七九七）に幕府が湯島聖堂に官学としての昌平坂学問所を開いた時、羅山以来収集された林家蔵書の全てにこの印を押して移管したとされる。続群書類従本と同系統の写本で、文明八年丙申（一四七六）から、明応四年乙卯（一四九五）までの二十年間の詩歌を収め、巻末の贈詩序、贈詩を欠く。

活字本

1. 續群書類従本 『續群書類従』第十二輯下・卷三三六・文筆部二〇。目録題「島隠集」「島隠漁唱」、序題「島隠集」、内題「島隠漁唱」。

2. 薩藩叢書本 扉題「島隱漁唱」、序題「島隱集」、内題「島隱漁唱」。『薩藩叢書』（薩藩叢書刊行会、一九〇六年）第二編別集に所載。テキストは、『續群書類従』卷三三六文筆部二〇による。『新薩藩叢書』（歴史図書社、一九七一年）では第四卷所収で、目録題のみ「島陰漁唱」。

写本の系統は、繁本、簡本の二系統に分かれる。繁本が、史料編纂所本、旧知覧文庫本で、簡本が、旧内閣文庫本、神宮文庫本、懷徳堂文庫本である。活字本は簡本の系統である。繁本は、書名を「島陰集」「島陰漁唱」又は「島隱漁唱」とし、文明八年丙申（一四七六）から、明応六年丁巳（一四九七）までの二十二年間の詩歌を収める。簡本は、書名を「島隱集」「島隱漁唱」とし、文明八年丙申（一四七六）から、明応四年乙卯（一四九五）までの二十年間の詩歌を収める。

桂庵玄樹は、成化四年（応仁二年、戊子、一四六八）北京滞在中より始めて、毎年正月元旦に詩を読むことを習慣としており、これを基準にすることで、詩歌の作詩年代が容易に判明する。ところが、簡本は、詩歌の年代順配列に混乱が見られる。続群書類従本について、見てみると、以下の通りである。

卷之上

六四八下 文明丙申六月朔……（巻頭詩）…文明八年（一四七六）

六五一上 丁酉元旦之作。予嘗以日域應仁元年。奉使而赴中華。其翌年在燕都。早朝大明宮。實成化四年戊子之春。予年四十二也。詩中記愚齡。爾來于今十春。隨例者如此。至祝。…文明九年（一四七七）

六五五下 戊戌元旦……依例記愚齡…文明十年（一四七八）

六六一下 己亥元旦……蓋隨例記愚齡也…文明十一年（一四七九）

六六五上 庚子元旦……蓋記愚齡者隨例也…文明十二年（一四八〇）

六七一下 辛丑元旦……蓋隨例也…文明十三年（一四八一）

卷之中

六七六下 壬寅元旦隨例記愚齡…文明十四年（一四八二）

六八一下 癸卯元旦隨例記愚齡…文明十五年（一四八三）

六八三上 甲辰元旦隨例記愚齡…文明十六年（一四八四）

六八四上 乙巳元旦隨例記愚齡…文明十七年（一四八五）

六八五上 丙午元旦隨例記愚齡…文明十八年（一四八六）

六八六下 丁未元旦隨例記愚齡…文明十九年（一四八七）

六九一下 戊申元旦隨例記愚齡…長享二年（一四八八）

六九六上 己酉元旦隨例記愚齡…延徳元年（一四八九）

卷之下

六九九上 庚戌元旦隨例記愚齡……延徳二年（一四九〇）

七〇二下 辛亥春首隨例記愚齡……延徳三年（一四九一）

七〇四上 癸丑元旦隨例記愚齡…明応二年（一四九三）

七〇九下 壬子春首隨例記愚齡…明応元年（一四九二）

七一二下 甲寅元旦隨例記愚齡…明応三年（一四九四）

七一四上 乙卯元旦隨例記愚齡…明応四年（一四九五）

繁本には、この問題点はない。以下、史料編纂所本（旧知覧文庫本により補う）の例を示す。

卷之上

四表 文明丙申六月朔……（巻頭詩）…文明八年（一四七六）

六裏 丁酉元旦之作。予嘗以日域應仁元年。奉使而赴中華。其翌年在燕都。早朝大明宮。實成化四年戊子之春。予年四十二也。詩中記愚齡。爾來于今十春。隨例者如此。至祝。…文明九年（一四七七）

一四裏 戊戌元旦……隨例記愚齡…文明十年（一四七八）

二三裏 己亥元旦……蓋隨例記愚齡也…文明十一年（一四七九）

二八裏 庚子元旦……蓋記愚齡者隨例也…文明十二年（一四八〇）

三八裏 辛丑元旦……蓋隨例也…文明十三年（一四八一）

五〇表 壬寅元旦隨例記愚齡…文明十四年（一四八二）

五九表 癸卯元旦隨例記愚齡…文明十五年（一四八三）

六三表 甲辰元旦隨例記愚齡…文明十六年（一四八四）

六五表 乙巳元旦隨例記愚齡…文明十七年（一四八五）

卷之中

六七表 丙午元旦隨例記愚齡…文明十八年（一四八六）

七一表 丁未元旦隨例記愚齡…文明十九年（一四八七）

七八表 戊申元旦隨例記愚齡…長享二年（一四八八）

八五表 己酉元旦隨例記愚齡…延徳元年（一四八九）

- 八九裏 庚戌元旦隨例記愚齡……延徳二年（一四九〇）
 九五表 辛亥春首隨例記愚齡……延徳三年（一四九一）
 九八表 壬子春首隨例記愚齡…明応元年（一四九二）
 一〇四裏 癸丑元旦隨例記愚齡…明応二年（一四九三）
 一〇九裏 甲寅元旦隨例記愚齡…明応三年（一四九四）
 一一七表 乙卯元旦隨例記愚齡…明応四年（一四九五）
 一二二裏 丙辰元旦隨例記愚齡…明応五年（一四九六）
 一二七裏 丁巳元旦隨例記愚齡…明応六年（一四九七）

『島隠（陰）漁唱』には、繁本、簡本ともに、巻頭には洪常「島隠（陰）集序」（弘治九年（一四九六）丙辰七月既望）を有するが、これは、佐々木永春によつてもたらされたものである。

佐々木永春⁸⁾は、明應三年（一四九四）、鹿兒島の桂樹院に桂庵玄樹を尋ね、その詩集『島隠集』を預かり、明應四年（弘治八年乙卯、一四九五）春に九州を發つた遣明船で寧波に渡り、仲秋既望、寧波の名士達に『島隠集』を示して贈詩および巖端「贈日本桂庵樹禪師詩序」を請い⁹⁾、さらに、明應五年（弘治九年丙辰、一四九五）七月既望に四明の洪常から「島隠集序」を書いてもらい、七月中に寧波を出帆帰国の途についた。したがつて、佐々木永春が中国に持参した『島隠集』は、明応三年以前の詩を集めた桂庵自訂本であり、二〇年間の詩を上中下三卷に配分した現行の簡本に対応している。よつて、簡本は、佐々木永春が中国へ持参した桂庵自訂本系統のテキストの伝来したものとなる。一方、繁本は、明応六年（一四九七）以降の編纂である。繁本では下巻が失われているので、推定であるが、もし、繁本が桂庵没後の編纂であるならば、下巻

に明応七年（一四九八）から桂庵没年の永正五年（一五〇八）までの詩を収め、各巻がそれぞれ十年前後の詩を収めるという構成になっていたのかも知れない。また、史料編纂所本にのみ見える題下注記に「有序見（于）文集」¹⁰とあることから、桂庵玄樹には別個に文集の存在したことがわかる。

本稿は、資料収集、解題を高津孝が担当し、校本作成を岩川拓夫（尚古集成館）が担当した。責任は両者が負うものであるが、複雑な作業をこなされた岩川による校本作成の功を多とする。

1. 荒木矩編『大日本書畫名家大鑑』（大日本書画名家大鑑刊行会、一九三四年）『日本人物情報大系』（第六八巻、皓星社、二〇〇一年）所収。

2. 『三國名勝圖會』（青潮社、一九八二年）卷三十一大隅國噲唼郡國分に「靈鷲山正興寺（割注…地頭館より戊方、凡三十一町）内村にあり、京都臨濟宗五山の中、建仁寺の末にして、本尊釋迦如來（割注…坐像、長二尺九寸、運慶作）夾侍迦葉、阿難（長二尺八寸、本尊同作）、開山佛智圓應禪師（割注…元弘三年、七月廿三日、寂すと云、元弘は一年にして、翌年正慶と改元す、故に元弘三年は、正慶二年なり）、當寺は、永仁中創建にして、正宮八幡の本地所、三箇寺の一（外二ヶ寺は、下の正國寺正高寺なり）なりと云、二世坦然和尚（貞和四年戊子五月廿五日于寂）開基にして、圓應は、勧請開山なり、天文十六年、八月廿八日、十刹の列たるべきとの論旨、及び將軍義輝の台翰あり」。正興寺については、『鹿児島県地名』（平凡社地方資料センター編、一九九八年）始良郡隼人町「正興寺跡」にその歴史について詳しい記載がある。

3. 『大日本古記録 上井覺兼日記 上』（東京大学史料編纂所編、岩波書店、一九五四年）p 二〇〇・天正十一年二月「五日……此座に玄龍首座と申被有合候」（校訂者注…正興寺、始良郡宮内）、p 二〇三・天正十一年二月「十日……代賢和尚御覽候て、被賦尊偈、同玄龍首座被廢尊韻」。桂庵玄樹の学問を伝える文之玄昌（南浦）は、一時鎌倉建長寺などに赴いた期間を除いて、慶長四年（一五九九）より、慶長十六年（一六二二）に鹿児島大龍寺の開山になるまで正興寺の住職であった。

4. 『知覧町郷土誌』（知覧町郷土誌編さん委員会、二〇〇二年）。
5. 『知覧町郷土誌』（知覧町郷土誌編さん委員会、一九八二年）。旧知覧文庫本『島陰漁唱』は、知覧文庫から流出した後、大分県の古書肆を経て、京都の其中堂の所蔵となったという。当時の佐多操知覧町長が購入を図ったが、天覧を経たため高額になり、断念したという。
6. 渡邊雄二『島陰漁唱』に読む桂庵玄樹の動向と雪舟（前編、後編）雪舟研究会『天開圖書』六、七（山口県立美術館、二〇〇六、二〇〇九年）。
7. 『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』（国立公文書館、一九八一年）。
8. 佐々木永春については、川上涇『送源永春還國詩畫卷と王諤』（『美術研究』二百二十一号、一九六二年）参照。その明應年間の渡明については、小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院、一九六九年）第三章第六節「明應度の遣明船」による。
9. 史料編纂所本の巻末および伊地知季安『漢学紀源』桂庵玄樹の条に引く。巖端序は「弘治 年日長至」と年号は空欄になっているが、弘治九年（一四九六）夏至と推定される。
10. 史料編纂所本、十三裏「重次中之字呈限部公」下注「有序見于文集」、四十六表「送大醫陳祖田詩」下注「有序見文集」、八十三裏「送雲夢禪師東京之行詩」下注「有序見于文集」。

凡例

1. 本稿は、底本として近世後期写本と推定される旧知覧文庫本を使用する。本来ならば、近世初期写本と推定される東京大学史料編纂所本を使用すべきであるが、全冊にわたって下部の一字から六字前後を闕失しているため、同系統の旧知覧文庫本に依った。但し、二本ともに、上中下三巻の内、下巻を欠く。
校訂に当たっては、以下の各本を使用した。
知覧本…旧知覧文庫本（曹洞宗泉岳寺所蔵）
東大本…東京大学史料編纂所所蔵
阪大本…大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵
神宮本…神宮文庫所蔵
内閣本…国立公文書館旧内閣文庫所蔵
類従本…『續群書類従』第十二輯下・卷三三六・文筆部二〇
但し、内閣本は、誤写が多いため、参考とするに止めた。
3. 字体はJIS第一水準第二水準に従い、基本的に旧字体を使用した。異体字の処理に当たっては、『異体字解説字典』（柏書房、一九八七年）を参考とした。なお、くりかえし符号は、本来の字に直した。

島陰¹漁唱 乾

1 陰 阪大本・神宮本・類從本「隱」。

島陰集序

人生覆載間、性同天地之師、形同天地之塞、所以有華夷之辨者、豈以其疆土之遠、風氣之殊耶、亦曰、徒有是形而不知性爲何物也、楊雄³謂、在門牆則麾之、在夷狄則進之者、蓋有以也、日本國在東海之東、自後漢始入中國、由是得觀墳典之全、聞周孔之道、而用夏變夷、是以其國雖舊、而俗則新矣、若唐之粟田授經於四門助教趙玄默、仲滿之慕華⁵不肯去、宋之裔然能屬文善隸書者、要皆與華人相後先也、是豈可得而少之哉、我朝太祖高皇帝、法天爲治、聖子神孫、繼體守成、而薄海內、無不被其教化、故凡越裳肅慎獬高麗諸蠻國、遣使入貢白雉⁸楛矢之類者、肩摩踵接無虛歲也、今天子改元弘治之八年、日本國復譯而來朝、舟次吾鄣江上、一日有客、持其國南禪寺僧桂庵島陰集⁹凡若干萬言¹⁰詣予、不解華語、索紙筆以告予曰、桂庵吾國縉流中之翹楚也、精內典、通儒書、旁及莊列¹¹、無一之不究心矣、成化四年、觀光上國、得從華之大夫士遊、益增其所未能、歸避亂居豐筑肥之三州、凡其吟詠性情應酬干求之作皆在於是、終居薩州之覺島、故名島陰集¹³、敢丐大人先生一言、以序之、儻蒙不拒、其爲榮幸曷可言哉、予嘗見其紀夢遇舊之作、能曲盡離索之意、則固心敬之矣、及觀是集、則誠不在於華之作者及其國粟田裔然之下也、可嘉也已、乃不辭而爲序、以歸之、弘治九年在¹⁴丙辰七月既望

賜進士第奉政大夫脩正庶尹兵部選清吏司郎中致仕奉詔進階朝列大夫大明洪常子經序

紀夢¹⁶

歸夢飄然落海東、赤城舊院杏花紅、坐迎諸友一樽酒、似慰多年離別中、¹⁷¹⁸

遇舊

途中適遇四明人、一笑如同骨肉親、可有扶桑新到客、報言東魯送殘春、¹⁹
右二詩、乃日本東居座永福玄樹師、於成化四年遊吾國時所作也、吾詞林評、有唐人之風、茲集中所作失、因附錄錄于左方、友梅識、

1 陰 阪大本・神宮本・類從本「隱」。2 其 阪大本・神宮本・類從本「厥」。3 楊 東大本・阪大本・神宮本「揚」。4 在 神宮本「有」。
5 慕華 阪大本・神宮本「慕花」。6 大 東大本・阪大本・神宮本「太」。7 内 阪大本・神宮本・類從本「内外」。8 東大本傍注「胡古切、木、中作矢、奇」。9 陰 阪大本・神宮本・類從本「隱」。10 言 神宮本「古」。11 列 神宮本闕。12 得 東大本闕。13 陰 阪大本・神宮本・類從本「隱」。14 在 東大本・阪大本・神宮本・類從本「歲在」。15 選 阪大本・神宮本・類從本「武選」。16 紀夢 阪大本闕。17 離別 東大本・阪大本・神宮本「別離」。18 阪大本、小字「紀夢」。19 「報言」以下、東大本・阪大本によつて補う。但し、阪大本・神宮本・類從本は「日」下に「本」を欠き、阪大本は「因附錄于左方」に作り、類從本は「座」を「坐」に作り、阪大本・神宮本・類從本は「友梅識」を欠く。

島陰¹漁唱卷之上²

1 陰 阪大本・神宮本・類從本「隱」。2 阪大本、小字「自文明八丙申年至安永三甲午年、已二百九十九年」。

文明丙申六月朔、予避豐城之亂而入後筑、二十有四日、到大竹山二尊精舍、主盟源東谷、與予舊交之尤厚者也、¹
十一年、分床於赤城之弊寺、是時予將南遊焉、公亦告別而去矣、爾來干戈塞途、而并汾絕信、何以獲慰惓惓焉、然則此會也、實出乎不意、豈爲不怪耶、所愧龍鍾之客、而漫陪慶談之美、仍作是詩、

寺拜二尊山幾重、扣門是處寄行蹤、南遊十一年前別、西海三千里外逢、師已匡徒耐龜鑑、吾今爲客轉龍鍾、清談坐久夜涼榻、萬竹鳴風月在松、

1 舊交 類從本「舊友」。2 床 東大本「床頭」。

文明丙申之冬、予寓筑大竹精舍、偶聞法兄獨笑翁之在隣境、速遣僕問厥居、卽河陽縣中村庵最僻者也、翌旦往以得拜謁焉、是夕爐話、既及三更、京輦之古也、天末之今也、一榮一衰、或悲或喜、其情不言可知矣、昔蘇家兄弟、對床彭城之夜雨、離合攸感、今昔詎異、遂作川八句一章、蓋他日以爲錦旋之談資者乎、

茅鞋竹杖雙蓬鬢、天末吟詩伴阿兄、蘭若洛陽三十載、楓林楚水一千程、殘雲分宿團蒲濕、寒雨初乾落葉鳴、記取故山歸去日、連床夜話在彭城、

1 在 神宮本「有」。2 床 阪大本・神宮本・類從本「床於」。3 離 東大本「離舍」。4 竹杖 東大本「竹杖枝」、神宮本「竹枝」。

和法兄中心禪師詩、蓋十一年之前、與公會于長城永福之先廬、此年公赴大唐、予亦辭先廬、還于筑之前州、故語及之、客裡相逢忘爲客、除君無弟亦無兄、先廬分榻十年外、上國朝天萬里程、月暗汀洲鴻雁亂、風吹原野鵲鴝鳴、別來多少悲歡事、曙色開窗雪滿城、

1 廬、還 東大本「亦還」、阪大本・神宮本・類從本「而還」。2 語 神宮本・類從本「話」。3 裡 阪大本・神宮本・類從本「裏」。4 洲 東大本「州」。

重次珠光翁之尊韻

次第花開一年裡、水仙清客菊爲兄、窮陰蕭索歲云暮、故國迢遙路幾程、雖是江湖甘鷁退、未應風雨廢雞鳴、春來告別定何處、塞外山迷萬里城、

家世當時傾洛社、賢良最喜白眉兄、十年學道魚千里、四海搏風鵬一程、天上碧桃恩渥厚、月中丹桂美名鳴、何知今日蠻荒地、共送斜陽對古城、

雨聲竹屋笑談夜、情似蘇家老弟兄、飄泊江湖無定處、崢嶸歲月筭遊程、洞庭潮落帆初轉、豐嶺霜寒鐘自鳴、意想東歸身未遂、水長山遠赤間城、

1 遠 東大本「長」を「遠」に改める。

書珠光壁¹

秋風林落夕陽灣、黃葉青苔門半關、地爲栽花宜隱逸、居依愛竹適清閑、村南村北有無路、庭後庭前遠近山、萬頃菰田飛白鷺、奚囊添得數篇還、

1 阪大本・神宮本・類從本、小字「文明八年小春日書于筑後河崎宅間田珠光之室」。
3 庭後庭前 東大本「庵後庵前」に改める。阪大本・神宮本・類從本「庵後庵前」。

和天秀翁壁間詩

霜筠雪竹碧溪灣、葉片堆堆畫掩關、萬事拋來都不管、百年至樂莫如閑、犢邊烟暝小村落、鴉外雲飛何處山、數里西南市橋暮、袈裟又蹈夕陽還、²

1 踏 阪大本「踏」。2 東大本、小字「十一月□□…□□獨笑□□…□□」。阪大本・神宮本・類從本、小字「十一月初五還于大竹之客居獨笑翁挽袖責次韻」。

代人和交友之所寄

肥陽天遠去何之、故爲梅花約後期、從是孤村風雪暮、枝南枝北立多時、菊謝楓衰梅亞之、請君須蹈再遊期、從相別後無詩客、枕懶曉風殘月時、¹唐室雄文韓退之、師門業在後生期、與誰連句城南寺、竹影泉音欲暮時、

1 殘月時 東大本「殘時月」。

代人次韻

雨從別後聽初奇、院落秋風葉動時、緬想溫泉宮畔寺、鶯花春可臘前知、¹此人在小峰寺、寺隣鹿之陽、冬日牡丹詞吐奇、晚唐今似曙星時、詩翁千首好詩客、²獨許風流年少知、³丙申之冬竹山客居應僧某之求、⁴

1 鹿之陽 東大本「鹿之湯」、阪大本「鹿湯」、神宮本「山鹿陽」。2 客 阪大本・神宮本「格」。3 年少 東大本「少年」。4 丙申之冬竹山客

居應僧某之求 阪大本・神宮本・類從本闕。

和秋月種朝公題靈巖寺詩 序見于別錄¹

朶朶峰巒雲半空、上方蘭若翠微中、知君飛駕春遊好、紅白花開連夜風、
高僧行道轉頭空、三十年來一夢中、復憶香山老居士、詩成桂子落天風、
壯年才氣狹摩²空、名出漢家華譜中、殘夜雞鳴人起早、金鞍拂露柳營風、³

1 序見于別錄 神宮本闕、東大本「有序見于別□」。阪大本「有序見于別錄」。2 摩 東大本「磨」。3 東大本・阪大本・神宮本・類從本、小字「丁酉閏正中澣」。

得專掣禪師書、憶故人藤金吾之輩、¹ 書中有再會之語、²

春冷於秋似不春、今年花憶去年人、生前再會惣無賴、風雨蠻江老病身、³

1 人 阪大本・神宮本・類從本「友」、東大本は「人」を「友」に改める。2 書中有再會之語 東大本・阪大本・神宮本・類從本闕。3 以下、東大本・阪大本・神宮本・類從本、小字「書中有再會之語」。

靈巖周泉上人赴洛、次天秀翁之韻送別、

春遊我昔洛陽坡、情爲送君添得多、臺閣羣飛五雲上、姑蘇麋鹿又如何、

紫陽洞口暮天霞、離袖忽忽去路賒、¹亂後京東洛南寺、一枝何地舊時花、

1 忽忽 東大本・阪大本・神宮本「忽忽」。

吾友大極老、頃聞藥誨於醫王禪翁、去歲小春有書、是日偶得飛廉之便、寄是詩、醫王院在筑前宗像¹

去歲小春書一紙、報言今夏坐臞禪、單傳葉落不傳底、大極梅開無極先、龍帶雨來添鉢水、鳥啣花去避茶烟、有詩須付南飛雁、西塞山前碧海天、⁵

1 醫王院在筑前宗像 東大本・阪大本・神宮本・類從本闕。2 臞 神宮本「囉」。3 落 神宮本・類從本「薄」。4 啣 阪大本・神宮本・類從本「啣」。5 東大本「醫王院□□……□□居軒□□……」。阪大本・類從本「醫王院在筑前宗方郡極翁寓居軒名不傳」、神宮本「醫王院在筑前宗法郡極翁寓居軒名不傳」。

丁酉元旦之作、予嘗以日域應仁元年、奉使而赴中華、其翌年在燕都、早朝大明宮、實成化四年戊子之春、予年四十二也、詩中記愚齡、爾來于今十春、隨例者如此、至祝、

華髮逢春白蹈僧、百年爲半一年增、窗隣脩竹礪陰寺、隱几新吟吹硯冰、今春將有薩陽之行、一香獻詩神、以祝彼國之安平云、

肥陽城外薩陽城、聞說今年收甲兵、萬里雲飛駕言邁、風流太守愛僧清、竹山主盟春首賦詩試大手筆、仍和尊韻、

主山綠富案山春、梵語詩成句法新、好是風流竹尊者、梅花釀酒月爲賓、

1大 阪大本「太」。

香山僧周泉有詩索拙和、蓋州長官有求耶、

海外今雖亂後時、一州仁政二南詩、野無草賊往來滿、客路頭陀喜上眉、

1賊 神宮本・類從本「賦」。

人日鄰翁餉生菜

野人有意竹西鄰、時¹以菜盤風味新、招取村僧相對煮、農談終日土牛春、

1時 東大本・阪大本・神宮本・類從本「餉」。

元夕無燈、恰如祥府可久之房、蕭條可知矣、

無復蘭膏照夜禪、燒燈¹佳節客方眠、扣門去乞隣家火、半束濕薪吹不燃、

1燒燈 東大本「燈燒」を「燒燈」に改める。

菊城客舍上丁日、觀孔廟春祀之盛禮、

大平奇策至誠中、春奠賁筵陪泮宮、泗水吹添菊潭碧、塞¹雲染出杏壇紅、一家有政九州化、萬古斯文四海同、絃誦未終花
欲暮、香烟撲袂畫簾風、

1 塞 阪大本「塞」を「寒」に改める。類従本「寒」。2 畫 東大本「畫」を「畫」に改める。

闔府縉素詣泮宮、各獻詩文、或獻歌詠、縉郎某有詩求和、仍次韻、

千百年先集大成、道從之者致昇平、神壇布瑞花如雪、人蹈白櫻桃下行、

代人悼榮周俊童¹

十年作夢一家人、何識花飛離別新、月下吟魂招不返、悲風易雨暮²陰春、

1 榮周俊童 東大本・阪大本・神宮本「榮固俊童」、阪大本「榮固」を「榮同」と改める。類従本「榮同俊童」。2 暮 東大本・阪大本・神宮本・
類従本「墓」。

和叢侍者之韻

千里來遲不見人、因詩想像玉顏新、牡丹庭宇海棠院、花恨君曾所爰春、
少年十四五芳名、佳木欣欣春欲¹榮、夜壑舟移天地外、晨昏回首古今情、

小欄吟盡寫愁詩、鳥亦聲聲日暮悲、春半如秋榕葉落、風光不似去年時、²

1 欲 阪大本・神宮本「向」、東大本「欲」を「向」に改める。2 不似去年時 東大本「不去年時似」。

送叢侍者之歸勤¹麻山²

客裡春殘花竹寺、離亭哦句送君行、數椽沙驛孤村暮、一葉風帆半日程、若使天心感純孝、寧無家信報安平、麻姑山下長生藥、瑤草香甘風露清、³

1 勤 東大本・阪大本・神宮本・類從本「覲」。2 東大本、小字「慈母不安」。3 甘 阪大本「月」、傍注「甘」。

赴聖智寺值寰中禪師之忌齋¹²

山夾河流小路通、一溪脩竹萬株松、先師行道兒孫說、滿地天華昨夜風、⁴

1 智 阪大本・神宮本・類從本「知」。2 忌齋 東大本「忌前齋」。3 小 神宮本・類從本「水」。4 昨 神宮本「作」。

筑之萬松山書中知藏、與予同床於二愛亭下數月、今將歸松山之先廬、仍作詩送行、

關南萬里客中居、人爲論詩來起予、梅潦没堦旬雨後、竹風度戶夜涼初、舊遊因語交非淺、相送故知情有餘、吞碧樓頭萬松寺、袈裟歸去拜先廬、

1 中 阪大本・神宮本・類從本「仲」。2 先 東大本闕。3 語 東大本・阪大本・神宮本・類從本「話」。4 吞 阪大本・神宮本・類從本「天」。

八月十四夜呈隈部公

西窗看月坐深更、來日不知陰又晴、萬事人間皆缺滿、今宵心足十分清、

溫嶽禪郎不憚脩途之勞、得得而來、訪予於肥陽之客舍、實非道情之厚、何之有耶、作是詩爲謝、

錫尾清風海外秋、道情不厭客途脩、因君相約龍雲寺、異日僧床添一頭、

熊峰¹二水亭下、和自笑老人詩、

楓葉林巒秋一亭、客來敲戶睡初醒、相逢共說別離恨、風絮沙蓬水有萍、

1 熊峰 東大本「熊野峰」。

總管府隈部¹、辱賜一領之禦冬衣、北段²至精、南地所重、潔如香羅之疊雪、溫似青綾之裏³、諒非夫蘇章二天相比者、
何以及范叔一寒如此哉、光被惟夥、感服不已、謹賦小詩、呈鈴閣下、

色與香羅疊雪同、溫存拜賜白頭翁、滿天霜月僧床夜、身在春風仁愛中、

1 隈部 東大本・阪大本・類從本「隈部公」。2 北段 東大本は「此段」、類從本「北段」。3 裏 阪大本・神宮本「裏」。4 及 東大本闕。
5 鈴 阪大本傍注「鈴」、類從本「鈴」。

重依前韻

官閣論詩日日同、群賢座下一衰翁、交情不是許玄度、老去支郎奈客中、
輔佐仁君累世同、塞垣草木識吾翁、朝朝講罷國家事、詩律千篇談笑中、

1座 東大本「床」。2累 阪大本「素」。3垣 東大本「烟」。

予綴里語、呈總州刺史隈部公、公卽洒珠玉而見酬也、於是乎厥令子幸旭鳳毛和亦有賜、厥詞翰之妙、雖曰老乎、莫以逾焉、所雅望者、每每有此興耶、時時有此作耶、楓葉寒山之古寺、梅花雪月之官齋、一往一來、子也從事乎筆硯、予亦効其轍者也、仍用前之韻、作三絕、初以雲路之飛騰、餘以述客中之卑懷云爾、

白晝讀書清夜同、能詩可不讓爺翁、少年風采鳳凰嶽、上下祥雲五色中、
淡生涯客水雲同、自覺忘機如海翁、一夜蕭蕭風打葉、愁心疑雨旅窗中、
異鄉心足故鄉同、是處溪山稱一翁、定有與君相約夜、梅籬欲雪月明中、

1乎 阪大本・神宮本・類從本「手」。2三絕初以雲路 東大本・阪大本・神宮本・類從本「三絕句初以祝雲路」。3飛 阪大本・神宮本・類從本「蜚」。4卑懷云爾 阪大本・神宮本・類從本「卑懷云」。5東大本は、第二首と第三首が入れ替わる。

吏部郎源武貞公、投以一封之華牋、披而覽之、蓋擊節於予之鄙作者也、其辭也藹藹然殆如有響之珠焉、予頃遊乎名

府、而見君子、不爲少矣、可謂地靈人傑也、於戲乎若唐韓吏部之文章、獨步乎百世之間、公其庶幾乎、人其傑處境共同、愧我無能六十翁、吏部文章裁錦否、滿林楓葉夕陽中、

1 藹藹然殆如有響 阪大本・神宮本・類從本「殆如藹藹然有響」。2 否 神宮本「不」。

彈¹之州官源重清公者、予之道友松雪翁之所器重²也、翁也到處必說項斯也、是以稔其芳聲、殆年久哉、彼翁往矣、予偶來于茲、屢與公胥會焉、十話其八九及雪翁³、蓋故舊不忘者、君子道也⁴、可敬耳、頃有卑作之猥歷官覽者、公猶是乎拾瓊瑤之辭、賡而爲翁之舊也⁶、厥情不淺、仍用前韻呈一絕、公其感乎懷也耶⁷、芳聲今與素聞同、到處說君松雪翁、故舊不忘情易感、屋梁落月夢殘中、

1 彈 類從本「驪」。2 重 阪大本「量」。3 雪 神宮本「霜」。4 君子道也 東大本・阪大本・神宮本「君子之道也」。5 猶是乎 東大本・阪大本・神宮本・類從本「於是乎」。6 爲翁 阪大本・神宮本・類從本「爲贈焉是亦以予爲翁」。東大本傍注に、「爲贈焉」を「爲翁」前に挿入。7 其 阪大本・神宮本・類從本「厥」。

晋王戎幼而穎悟、神彩秀徹²也、阮嗣宗每過其父渾曰、與卿言、不如共阿戎談、戎之爲人也可知焉、禮部郎藤氏爲秀公、和予之漫韻、以二十八顆明珠、何賜過之耶、而猶抱不滿之心於拜賜之地何也、茲聞、若公之令子者、誠是一鄉之所艷望、實爲少年之玉色也⁶、其友以琴齋稱之、殆有大雅之遺韻者乎、予未獲傾耳於厥雅談⁸、以爲恨矣、故因嗣宗之言、漫裁一篇、以寄官閣之下、蓋野客一時之狂語、聊戲之耳、

少年俊秀古誰同、最愛阿戎勝阿翁、玉塵清談何夜月、琴齋其下畫屏中、

1 幼 東大本「幻」。2 徹 神宮本「微」。3 不 東大本消す。4 類明 東大本、阪大本・類從本「類之明」。5 猶 東大本「獨」。6 也 神宮本闕。
7 耳 阪大本「年」。8 雅 類從本「雄」。9 漫 神宮本闕。

和藤氏重貞公、公以禪悅爲遊、故語及之、

豈是高標與俗同、禪林風月扣師翁、千言萬語波波口、不出毘耶一默中、
跡似烟波張子同、海西何地稱漁翁、名藍佳境暫時客、送盡春花雪月中、

1 悅 神宮本・類從本「說」。

藤氏明星公賜和、壯語耐健人、所期望者、彌有新詩百篇之妙、克飛騰乎翰墨場中、則必不負李長庚之佳名者乎、勉之哉、

文采明明星斗同、長庚古化謫仙翁、期君一醉百篇玉、雲雨飛龍翰墨中、

重次中之字呈隈部公 有序見于文集¹

交至忘形儒釋同、參寥對榻老坡翁、風流近世誰相似、松雪題詩官閣中、
國家禍黨昔雷同²、公已兵官鬢未翁³、一戰安劉太平策、威加忠義智謀中、

三年南國一遊同、鬢白吟詩風月翁、半夜寒山鐘度枕、江村漁火客船中、

1 有序見于文集 阪大本・神宮本・類從本闕。2 昔 東大本「晋」。3 雷 神宮本「雪」。4 加 神宮本「如」。

汝南翁席上用同字互和者十章

人才地是汝南同、客裡對床知此翁、一語春風萬金賜、交情恨晚十年中、
十載干戈四海同、此鄉德化賴文翁、滿城花柳春尤好、慰得殘僧欲老中、
禪與詩文一樣同、紫陽今不可無翁、當軒坐斷熊峰上、四海空來雙眼中、
熊峰不與衆山同、人亦風流絕世翁、一醉陶然花欲暮、起來遊戲百篇中、
鏡容大士肉身同、百世西來堂上翁、故爲賢孫繼芳躅、名藍綦布九州中、

1 綦 神宮本・類從本「甚」。

題月舟畫軸

山似孤山雪初霽、南遊憶昨泛西湖、行人下馬過橋末、賈客停舟有酒無、
墟落寒烟幾蒙密、上方古寺一浮圖、尋梅欲問春消息、風杵揚揚鐘送晡、

1 末 阪大本・類從本「未」 神宮本「來」。

戊戌元旦、菊府熊峰蘭若、隨例記愚齡

袈裟五十二束風、洗硯題詩記客中、老去娛心莫春若、花先今日一番紅、
畫軸

尖峰削翠玉芙蓉、雲雨飛龍千尺松、客欲無詩寧可得、和風吹落寺樓鐘、

綉春雲 菊府聖觀寺雅席、代人

雲鎖春陰小洞房、下針片片上衣裳、晚來散作催花雨、添得宮人情緒長、

是日與專嶽翁詣于阿蘇山、出菊府行數里、嶽翁有詩、次其韻、²

家在東關萬里間、一身爲客百嘗艱、舊遊因話地相似、細認他山擬故山、³
十載周南石北間、干戈如雨苦多艱、一枝雲錫九州外、始覺此身閑似山、

1 出菊府行 東大本「菊府出行」。2 其韻 東大本「其翁韻」。3 他山 阪大本「宅山」、神宮本・類從本「它山」。東大本、「它」を「宅」に改める。

阿蘇山之歸途、過庶渡橋¹、而泝水行數百步、其左怪巖高擎、掛以飛泉、路之傍穿蒙密、而俯而視其下、則綠浪掀舞、
恰如薙麥布地、於是里人走告曰、危哉客之履地也、⁴河勢噬岸入者、足跡之下、皆深淵也、不知況百仞、予悚然汗流至踵、
潛移步就右行矣、⁶作此詩、爲途中警策、

險崖千丈掛飛泉、下有神龍襲九淵、蒙密穿來小窺見、風吹蒼浪漲青田、

1 庶 東大本・阪大本・神宮本・類從本「鹿」。2 附 東大本・阪大本・神宮本・類從本「俯」。3 人走告曰 阪大本・神宮本・類從本「人走曰」、東大本「人告曰」。4 履地也 阪大本・神宮本・類從本「履危地也」。5 況 東大本・阪大本・神宮本・類從本「幾」。6 矣 阪大本・神宮本・類從本闕。

山光四晴、草色遠連、專嶽翁有五字詩、次韻、

三年客中恨、共作海西人、豈謂春風紙、寫君佳句新、

春山啼一鳥、野客兩三人、蹈遍燒痕綠、詩如芳草新、

山路鬱屈、馬澁僕倦、漸下見平川、專嶽作詩爲喜、予復次其韻述懷、

山行七里到平川、各自他鄉雪滿顛、一別如今歷千日、明朝分手又何年、

予將赴薩州、一日客¹、胥告曰²、彼國干戈未收、路途難難³、雖舟行必有其勞乎、仍作是詩、

一錫西尋菩薩泉、干戈塞路不通船、青山綠水功勞外⁴、何處茅庵食與眠、

1 客 東大本・阪大本・神宮本・類從本「有客」。2 曰 類從本「田」、傍注「日歟」。3 難難 神宮本・類從本「艱難」。4 外 東大本闕。

薩陽道中和隈部忠直公之詩 有序別錄之¹

萬里風波一葉輕、白鷗面熟舊時盟²、作詩欲報高官賜、細雨疎烟總是情、
一士千金義不輕、白蓮憶結社中盟、風生玉塵清談夕、官爲愛僧傾道情、
蹤如雲葉去輕輕、何處江山稱主盟、二水亭邊脩竹寺、再遊有約暮年情、

1 有序列錄之 神宮本・類從本闕。2 熱 東大本「熱」。

文明十四¹戊戌二月二十²有一日、達薩陽龍雲精舍、忽脫草鞋詣函丈、左右見相顧之厚、寔重主之命也、一夕坐話之次、求予近作、蓋詩者志之所之也、前年在後筑之元旦、燒香西南、以祝是國之安平、其詩袖中之所携也、出以備尊覽、主盟禪師賜感和、於是次其韻作小詩、且記觀光之初筵也、
花柳風前春滿城、太平家國⁶不言兵、白頭老矣紅塵客、纔入此門心跡清、

1 十四 類從本傍注「十年歟」。2 一 東大本闕。3 陽 東大本「州」。4 西 東大本・阪大本・神宮本・類從本「面」。5 且記 東大本「且記願」として「願」を消す。6 國 東大本闕。

文明戊戌孟夏¹十有一日、予隨太守²、遊于冠嶽教寺、境佳而人傑也、山名冠、又號仙者、昔秦徐方士駕樓船、而求藥於蓬萊之仙府、始來于此地、脫彼衣冠而著我釋服、遂相攸以棲止焉、山之巔有水、清淺而可浸手、雖霖潦之夏、不添其深、旱亦無曾乾、靈異匪一、或以爲蓬萊、殆不妄者乎、今也不啻入此佳境、剩陪貴遊之席、寔千載一遇³也、不堪歡拊之至、謹製里語三章爲記焉、

徐福曾從海外來、初知日域是蓬萊、仙園花木春常有、祝得邦君萬壽盃、
仙藥花飛絃管樓、滿筵佳士喜清遊、主人有德境彌顯、一嶽高擎冠九州、
從一神人來脫冠、仙山景象遶天壇、層巖萬丈絕巔水、雨不添深旱不乾、

1 孟夏 東大本「孟春」を「孟夏」に訂正。2 太 東大本・阪大本「大」。3 千載一遇 阪大本・神宮本・類従本「千載之一遇」。4 歎 阪大本「觀」。

惠山大門禪師頃留錫於薩陽府、今將東歸、一日過龍雲翁、因告千里之脩途、聊以五絕之佳章、可謂言簡而情備也、予不顧卑蕪之詞、謾步嚴韻之末、壯厥行色、

天涯爲客處、壯語喜逢君、豈謂梅霖夕、月來風破雲、

屢見遺賢出、憑誰數五君、山蘿風擺後、夜鶴護殘雲、

客舍暑塵底、開窗對此君、垂垂吾老矣、跡欲懶於雲、

叢社再興日、受恩朝聖君、飛騰天只赤、五嶽脚跟雲、

禪林風月老、來謁紫陽君、衰鬢莖莖雪、新詩靄靄雲、

1 聊 阪大本「耶」。2 壯 阪大本・神宮本・類従本「以壯」。3 阪大本・神宮本・類従本は詩題として「又」あり。4 阪大本・神宮本・類従本は詩題として「又」あり。5 赤 東大本闕。6 阪大本・神宮本・類従本は詩題として「又」あり。7 阪大本・神宮本・類従本は詩題として「又」あり。

1 六月十有七日、隨龍雲翁、宿千憩源庵、

暑氣炎炎天若蒸、偶行佳處簇烏藤、一溪流水千竿竹、詩思清人六月氷、

1 東大本は「扇面猿」題下に本詩を書き込む。2 千 東大本・阪大本・神宮本・類從本「于」。3 東大本「有前」。4 若 阪大本・神宮本「如」。
5 行 東大本・阪大本・神宮本・類從本「尋」。

次玉洞翁之韻¹

夏日敲門覺有秋、竹間潑潑引溪流、暑塵不著禪餘榻、萬斛清風一話頭、

1 東大本、小字「此有詩」。

扇面布袋¹ 爲大府君題

平日忘形半小童²、滿囊明月與清風、此翁仁愛和爲德、遊戲邦君美政中、

1 大府 阪大本「太守」、神宮本・類從本「太守」。2 半小童 神宮本「小半童」。

扇面蘆雁

風葦籠秋水水濱、雁貪好景此來賓、鳥猶隻影喚群否、客裡厭多今一身、

扇面 爲哦松居士題

蘆葉風殘雪滿洲²、雙雙無復離群愁³、上人只亦高飛翥⁴、⁵漢節天知塞外秋、

1 葉 阪大本・神宮本・類從本「絮」。2 洲 東大本「州」。3 群 神宮本闕。4 人 東大本・阪大本・神宮本「林」。5 亦 東大本・阪大本・神宮本・類從本「赤」。

扇面猿¹

雲埋老樹半巖欹、幾箇黃猿領白兒、祇爲遊人驚異域、三聲不切淚先垂、

1 扇面猿 阪大本・神宮本・類從本「扇面之猿」。

小詩一章、送叢公侍史歸肥陽、蓋杜若園者、此公嬉遊之地也、因語及之、
鐵笛數聲風滿樓、客中送客一人留、舊遊續否歡娛地、杜若名園綠水秋、¹

1 東大本・阪大本・類從本「文明戊戌八月四日」。

文明戊戌八月十有七日、隨龍老師、東將赴大隅州、解纜之次作是詩、
客裡秋深出國都、西風吹送海東桴、飄飄此去知何處、路入大邦天一隅、

1 龍老師 東大本・阪大本・神宮本・類從本「龍雲老師」。

和玉洞翁發麿島之韻

黃蘆¹灣水白鷗濱、一嘯詩成喜興新、老矣江湖吾樂土、竹間漁屋卜誰隣、

1 黃蘆 阪大本「蘆黃」。

十八日宮内客舍

茅檐短短暑塵飛、偶上林亭對翠微、一雨晴來雷不鼓、袈裟帶得晚涼歸、

宮内和玉洞翁之韻

四時三百日風光、送盡青春與素商、過雁一聲殘月曙、故園消息海天長、

十九日、歷七里原、西南有一島、曰向島¹、文明丙申秋、火起焚島、烟雲簇也、塵灰散也、青茅之地忽²變白沙堆、滄

桑之嘆、不克蔑于懷、作是詩

烈火曾燒一島來、桑田碧海總休猜、去年澗底草深處、七里平原沙作堆、

1 島 東大本・阪大本・神宮本・類從本闕。2 地忽 東大本「忽地」。

七里原次玉洞翁之韻

山似崑崙最上巔、風吹猛火起雲烟、平岡七里沙如雪、草樹何愁白髮前、

廿日到日州

長門萬里隔鄉關、路歷豐城肥水間、障日峰頭向前去、一遊見盡九州山、

同和玉洞翁之韻

鄉路迢迢夢欲迷、風林殘月影高低、百年唯可客中老、行盡日南州里西、

二十八日、到志布志之舟中、秋熱困人、水程甚遠、作詩述懷、

海門潮落櫓聲忙、八九家村欲夕陽、殘暑困人推不去、扁舟兀坐水程長、

二十九日拜大覺寺殿塚

貴家兄弟玉連枝、隻影韜光天下知、身後朱門花寂寂、眼前青塚草離離、河流近海風濤激、山氣衝林寒日欹、鳥亦哀吟助愁否、行人無淚立多時、

1 無 東大本・阪大本・神宮本・類從本「垂」。

次玉洞翁拜大覺寺殿塔之韻

窮達由來勢不齊、¹朝陽東上夕陽西、秋風吹老紫荊樹、一寸愁胸萬斛泥、²

1 齊 神宮本「齋」。2 泥 阪大本「淚」。

文明戊戌菊節前二日、太官¹藤氏吏部公、偶駕小舟而出遊、去城東殆里許、遂入普門境、境乃日州之勝地也、此樂也聊足以活平生、固爲可喜、因作是詩、

白首東西南北客、偶遊此境眼初驚、國分島嶼一千里、天隔滄浪三萬程、菊水傾盃大官樂、華軒捧硯小童清、倚欄立盡月明後、秋寺鐘殘猶數聲

1 二日大官 東大本・阪大本・神宮本「二日與大官」。2 南北 東大本「北南」。3 偶 阪大本「隅」。4 嶼 類從本「岐」。5 隔 東大本・阪大本・神宮本・類從本「入」。

遊普門教寺同玉洞翁之韻

扁舟朝出去城東、路入普門佳境通、著得詩人故多態、江楓紅映碧波中、袈裟來伴大官遊、海貨蠻珍載在舟、此景詩人若猶足、半叢風葦一沙鷗、

1 猶足 阪大本・神宮本・類從本「知足」。

是日普門精舍、偶與仙嶽禪伯胥會、詩以見示、雅然有作者之風、況繫于門系乎、因走筆賡韻、風卷波濤晚來急、怒雷聲入海門轟、詩人活句奪天筆、孤客沈吟挑夜檠、異域業成三十載、故園路熟一千程、爲君說盡先廬昔、惠日峰高照洛城

1 是日普門 東大本・阪大本・神宮本・類從本「是日遊普門」。2 嶽 類從本「兵」。3 一千程 東大本「千□□」。

重次前韻

客裡茅庵少人間、村橋西路犢車轟、春花雪月三千里、夜雨江湖長短檠、白髮慚吾雖晚達、青雲期子有前程、功名競駕英雄士、鼎國山川多古城、

1 問 神宮本「門」。2 里 阪大本・神宮本・類從本「首」。

日州歸途、將達七里原、而宿一村家、搜茆壁之間、獲麻布之帳、祕封珍襲、如護奇物、蓋以爲其神廟前之具也、玉洞翁感其敬心、而爲作銘文、家主不耐歡喜拜戴之至、卽設祭儀、掛之廟戶、是夕也、且頒社醅一瓶、聊代茶盃之禮、予受以有難色焉、洞翁莞爾嘆曰、所謂酒臺盤與祖師意、豈有他耶、於是剩言詩以爲謝、是亦仁愛之一端也、予亦不得默止、次韻擊節

楓葉村村紅滿川、風飄錦帳古祠前、雙樽眞味社醅熟、灌作茶盃獻老禪、

1 其 阪大本・神宮本・類從本「某」。2 嘆 類從本傍注「咲歎」。3 日 阪大本「云」。4 盤 阪大本・神宮本「全」、類從本「盤全」。5 耶 神宮本「聊」。6 愛 神宮本「受」。7 止 東大本・阪大本・神宮本・類從本闕。8 韻 神宮本「員」。9 帳 東大本闕。

九月十二日、甫詣大隅正八幡宮、謹賦小詩、以代青詞、

千年廟食古祠深、家國競傾崇仰忱、不用周人論戰栗、宮前松柏翠森森、

1甫 阪大本・神宮本「肅」。2仰 阪大本「御」。

和玉洞翁應神天皇廟二首¹₂

神威無古亦無今、惟德偏³依誠意深、默禱燒香明月夜、松花吹露洒衣襟、
國得仁君莫似今、及民德澤海波深、數篇詩律清平調、唱出吾翁雪月襟、

1應神 阪大本・神宮本「題應神」。2二首 東大本「詩二首」。3偏 類從本「徧」。

扇面

歸牛村遠夕陽中、郊外誰家小牧童、寸寸休牽鼻繩索、雙趺背上一鞭風、
天地爲心物外遊、並鞍¹扣角到林丘、百年只可自然老、世上是非風馬牛、
老樹未春疑着花、寒風捲地雪斜斜、擔⁴頭雖重忘勞否、村近橋南有酒家、
一水長天不見山、淡烟零落暮江灣、柳陰知有人呼渡、舟子回篙欲載還、

1鞍 神宮本・類從本「鞭」。2着 阪大本・神宮本・類從本「著」。3寒 神宮本闕。4擔 類從本「檐」。

己亥元旦、呈龍雲老師¹、蓋隨例記愚齡也、

詩亦如禪我可參、不侵正位好司南、南詢筭老類童子、五十過來一二三、

1 老師 東大本「老禪師」。

賡園¹ 公典藏元旦之韻

菩薩泉南西海涯、謝君隨我歲華加、禪餘好是詩文學、異日錦旋鄉國花、²

1 園 東大本・阪大本・神宮本・類從本「圓」。2 國花 東大本「園花」、「園」字に「苑」と注記。

和之問禪伯賀正之芳韻

東風吹送海南春、鳥語山容總可人、時復聖明僧鳳出、禪林競見德輝新、³

1 伯 阪大本・類從本「老」。2 語 東大本闕、注記で補う。3 見 阪大本・神宮本・類從本「覩」。

唐律一章送隆少年歸鄉閭

風雪三冬溪水隈、客居隣竹喜君來、每朝攤卷五千字、終夜分床一兩回、總使絲情濃似柳、何堪玉貌潔於梅、鶯花別後山陰寺、門徑春深鎖綠苔¹

1 綠苔 神宮本・類從本闕。

花下會友

花影侵簾月上欄、能詩坐客半高官、有梅此夕初筵好、紅海棠開又牡丹、
新築成時花是梅、細吟香影雅筵開、此遊好使請公續、桃李明朝春一盃、
和惠少年試毫

韶光二十四番風、衰鬢莖莖雪未融、客裡期君春亦暮、落花吹作馬蹄紅、¹

1 紅 阪大本・神宮本・類從本「塵」。

扇面折枝梅花并水仙¹

攀折羅浮半朵紅、水仙微步碧波風、花中自有好兄弟、欲爲山礬添畫工、

1 水仙 東大本闕。2 仙 神宮本・類從本「泉」。

扇面 薩州閣下之求¹

青衫何處老先生、童子讀書家業清、盆有明珠瓶有酒、醉中天地樂昇平、

1之求 阪大本・神宮本・類從本闕。

扇面 爲匠作公題

華構連雲碧海東、誰知蜃氣奪人工、樓前擬望兩詩客、欲摘星辰乘曉風、

1擬 阪大本・神宮本・類從本「凝」。2曉 類從本「晚」。

便面小景¹ 爲某新郎寓留別之意²

山連覺島是吾廬、一別明朝萬里餘、津樹沙禽如送客、扁舟解纜暮涼初、

1便面小景 阪大本「扇面小景」、神宮本「扇面」、類從本「扇」、類從本傍注「面脫敷」。2爲某新郎寓留別之意 阪大本、「新」を「某」に作る。神宮本・類從本闕。3吾廬 阪大本「我廬」。

晚江歸釣圖

潮遶苔磯水一痕、歸漁能釣近黃昏、半蓑裹得遠江雨、步入殘暉浦口村、

1裹 阪大本「裏」。2暉 東大本・阪大本・神宮本・類從本「陽」。

和匠作閣下竹院圍碁詩

娟娟脩竹玉堆堆、碁客敲門履印苔、因憶爛柯山上路、一遊送盡百年回、

扇面

雲籠臺殿古招提、壠斷岡橫路轉迷、一抹殘陽數行雁、秋風吹落塔婆西、

有客稱孤雲、一夕訪予於海涯之新居、未及下榻、而留詩去、其風標可知、仍次韻作二章、蓋攄挽留之意也、

天涯換盡故鄉衣、隻影憐君知己稀、自說孤雲朝出岫、飄飄此去又何歸、

五十天涯一布衣、門迎佳客近來稀、晴沙籠月夜如雪、人棹扁舟興盡歸、

1 東大本、小字「孟秋」。2 晴 神宮本「暗」。

題鷄戶廟前¹

扶桑開闢帝王城、神武靈蹤今古驚、定有龍燈照深夜、海濤打岸怒雷聲、

1 阪大本・神宮本・類從本「閏九月朔」。

和大慈寺伯外史所寄

日州城畔客遊身、秋色蕭條易惱神、塞草霜枯蛩未蟄、淮苔水淺雁初賓、詩文通好同門老、談笑傾懷似故人、波上蓬萊花

滿樹、寺隣仙島四時春、

1 萊 東大本「來」。

扇面

近山高聳遠山橫、館舍臨江三四楹、客未繫舟先厭地、長松夜半子規聲、

呈聚景主盟湖月翁 有序失之

伊水城東聚景園、梅花院落去敲門、連詩坐對風霜榻、春在吟翁胸次溫、

去歲孟夏、予隨太守及幕府之諸公、遊冠嶽靈地、蹑蹻如唯謹爾、今也仲冬初四、再入山、雖涉日以無爲、故爲幼學講魯論、是夕雪晴月清、偶與教徒數輩童子六七人、泝溪水而折梅還、興誠不淺³、仍作小絕句、以記再遊之夕、前年官駕入山時、白首追隨驚境奇、好是梅花溪上月、數枝冰玉再遊詩、

1 太 東大本「大」。2 以 神宮本・類從本「次」。3 淺 類從本「殘」。

和冠嶽主席佳作

房房晚掩白雲深、路自巖根通磳¹陰、雖是山中非舊宅、霜松雪竹歲寒心、

1 礪 內閣本・阪大本・神宮本・類從本「潤」。

用前韻

風景蕭條歲暮時、仙山移步物皆奇、松間積雪¹吹花落、鳥亦關關似督詩、

1 積雪 阪大本・神宮本・類從本「暮雪」。

冠嶽、薩之靈地也、後巖峭峻、其巔貯一水、清而窪者、恰似硯池之形、雖歷淫雨甚旱、未嘗視其有乾溢、胥傳云、²
稚子幼童之學字也、掬以供硯滴、則無不能書者、故水之名鳴乎海西、不亦奇哉、山之主席作詩見示、仍賡韻且述故事、
日上高巖宿霧開、連空青壁絕梯媒、兒童學字硯池水、筆下龍蛇送雨來、³

1 貯一水 阪大本・神宮本・類從本「貯於一水」。2 云 東大本「曰」。3 東大本・類從本、小字「霜月廿有二日」、阪大本「霜月二十有二日」。

次廣濟主盟尊韻謝高軒過 有序不記

竹映晴沙¹映苔、豈圖高駕此飛來、緇林今視鳳凰玃、一朵祥雲五色開、

1 晴 東大本闕。

文明己亥之冬、熊峰叢公典藏得得來、而訪客居於薩之海涯、袖出一軸云、¹是乃我山珠林翁、托以贈公之佳篇也、予受以薰之讀之、雅然壯語、頓洗塵懷、嘻翁之有德望、予之所敬仰也、況亦千里之外、拜此萬金之賜、不耐歡抃、賡高韻爲答焉、

二水橋頭楊柳風、肥陽佳處國都東、寺臨紫陌花千樹、地擁珠林竹一叢、寒會憶傾盆底綠、暮顏共喜鏡中紅、師門泰斗今猶古、海外逢人說我翁、²

1云 神宮本「曰」。2東大本「立春十日」。

熊峰嘯月老借韻於珠林翁、作詩寄以遠信、雖華衰之賜、豈敢過之乎、不耐感戴、漫攀嶮押者一篇、書以呈其床下、賢君治化自清風、每憶曾遊吾欲東、萬朶朱櫻霞片片、千秋金菊露叢叢、山擎熊耳鎖空翠、¹塵打馬蹄飛軟紅、一軸新詩華衰賜、海西客舍起衰翁、

1耳 神宮本「早」。

兩官人來告曰、我今有數十里行、不可不告、因出扇求詩、小景與時宜相似、¹故作是詩、²四面無山數十程、人鞭快馬並鞍行、一翁回首一翁說、暮宿天邊日已傾、³

1東大本「與時義」、阪大本・神宮本・類從本「與今之時義」。2作是詩 阪大本・神宮本・類從本「作焉」。3人 東大本闕。4暮宿 神宮

本「暮顏宿」。

庚子元旦、製禪詩一章、以祝檀恩之無窮、蓋記愚齡者隨例也、

五十三過又一年、新庵稱主白頭禪、春風浩蕩恩波地、門外長江水浸天、

月舟圓典藏、和三元之愚作、藹然詞葩、略得體製、豈可不賀乎、仍賡韻作一絕、且述錦旋之在近云、
翰墨場中最少年、喜君詩已熟於禪、歸鄉卜日二三月、錦樣鶯花驛路天、

1 少 阪大本・神宮本・類從本「壯」。

孤雲禪伯和予歲首之作、其語有味、不耐詠賞、重次韻、

一鉢江湖二十年、懶三昧外別無禪、爲君推出安眠枕、花影簾前日午天、

和伊川¹處守政秀公賀正詩

嫩日映簾花柳春、天開景象物皆新、伊川⁴君子好詩律、白首長吟欲効顰、

1 川 東大本「州」。2 嫩 阪大本・神宮本・類從本「嬾」。3 皆 阪大本・神宮本・類從本「色」。4 川 東大本「州」。

官橋柳色

城南門外畫橋東、官柳枝長弄暖風、¹花亦向陽開最早、鵝黃色已映猩紅、

1 風 阪大本「氣」。

代人

鵝樣染成鷺日天、橋頭柳色遠相連、旌旗拂露千官路、綠映朱欄春一川、

熊上人、長府金谷之英柄也、一錫遊乎四万年久矣、頃探古洞之春色於紫陽之名刹、到處以禪客待焉、可敬哉、今將東歸、仍作川八句一章、贈厥行、蓋有鄉友知予之存者、千里外必垂一念耶、

香霧籠花暗似塵、離亭又見柳條春、紫陽洞口送禪客、金谷園中間故人、愧我衰遲衰謝質、羨君自在自由身、官如有赦生歸國、流落隨緣¹西海濱、

1 緣 神宮本「綠」。

熊上人臨發、重求詩於扇面、

客到松陰小草堂、袈裟相送陟高岡、雲山萬里駕言邁、水驛千家路轉長、春寺霞晴擎雁塔、暮江浪穩聚烏樯²、因詩欲記別時景、去袖忽忽³有底忙、

1 詩於 神宮本「於詩」。2 烏 阪大本「鳥」。3 忽忽 阪大本・神宮本「忽忽」。

扇面梅花

姑射仙姿冰玉梅、枝從牆外暗拋來、芳鄰知有能詩客、踈影吟殘花一隈、

扇面老松寒鴉

老松屈曲歲華深、鴉墨投林欲暮陰、材大由來耐容物、天涯慰否後棲心、

扇面鬪雀

野粟啄來場圃秋、群飛竹外晚啾啾、佳名怪底太平雀、小羽翩然鬪未休、

扇面山水

鼓樓巖下梵王宮、臺榭臨江多晚風、客未問津舟解纜、家山望斷海天東、

1 榭 類從本「樹」。

月舟典鑰還于肥之桐瀨、作詩一章、告別於諸公、次厥韻壯行色、
菊水城西桐瀨濱、花時千里拜萱親、故園桃李家家月、記否湘南鷗雨春、

1 雨 知覽本傍注「鵠イ」。

送圓典藏歸鄉

瘴烟換面蠻荒地、君不云來奈我衰、軟語分床心緩緩、閑吟連袂步遲遲、一窗螢雪三餘學、千里鶯花幾首詩、旅恨春愁況

臨別、柳條無力晚風吹、

扇面¹

沙禽影暗浦村烟、隔岸鞏音繫釣船、人挾歌辭坐舒嘯、淡山落月曉猶懸、

1 東大本、小字「爲和泉越前翁能歌詠」、阪大本・神宮本・類從本、小字「爲和泉越前翁此翁能歌詠」。2 歌 神宮本・類從本「詞」。

3 曉 神宮本・類從本「晚」。

行人臨發而出扇求詩、其小景一鳧泛水、而有與波相上下之趣、謾走筆以應求焉、蓋¹南翔北飛之語、出乎蘇李語別之篇中、豈是無感乎、

葦間春水水中鳧、上下隨波憐影孤、惆悵南翔北飛猱、河梁離色畫成圖、

1 蓋 東大本闕。2 之 神宮本闕。3 是 東大本・阪大本・神宮本闕。4 色 神宮本・類從本「聲」。

和冠嶽主席春晚過山寺之詩¹

松葉連邊茅屋斜、尋僧是夕坐寒家、人間風日都無管、院院藏春一塢花、

1 東大本は本首を次首の次ぎに置く。2 邊 東大本「近」。

重和冠嶽主席詩

一半如春一半秋、落花榕葉雨中樓、
非逢識字敎家者、老矣南州奈客遊、
和廣濟主盟春晚作

九十韶光一夢回、惜春聞說坐亭臺、
漁歌難和鳳鳴¹韻、跡老江花沙竹隈、

1 鳴 神宮本「風」。

天秀法兄禪師賜書、副以佳作、仍次厥韻者二章、
客舍天涯奈¹老年、展書故憶²我翁賢、
鎖春亭畔五雲寺、一派聚頭居瑞泉、
一夢京遊二十年、尋師到處會³諸賢、
衰衰老矣極⁴西地、雙袖⁵龍鍾淚似泉、

1 奈 阪大本「祭」。2 憶 神宮本・類從本「懷」。3 師 東大本「詩」。4 會 類從本「令」。5 雙袖 神宮本「隻袖」。

以文禪伯西遊之次、訪予於海涯新居、倒衣出迎、促榻胥語、遂賦四韻一章見示、蓋述別來踈闊之嘆也、余亦次韻、
寓其意、¹

慰藉足音空谷聞、²忽忽倒屣出迎君、³
別來多少參商恨、相對是非涇渭分、
照砌石榴紅似錦、連檐淇竹碧⁴於雲、
禪林風月詩
中眼、襟宇清然思不群、⁵⁶

1 東大本、「語」を「話」に作り、「其韻」下に「云」。阪大本・神宮本・類従本にはこの前文なく、以下の前文あり「以文禪伯、飛錫而訪予於海涯之新居、此老予之所敬也、是以倒衣出迎、下榻相對、十話其八九、及斯文之盛衰、豈無感乎、於是有詩、次其韻」。2 慰藉足音空谷聞

阪大本・神宮本・類従本「海畔新居白鳥群」。3 展 東大本・阪大本・神宮本・類従本「履」。4 碧 神宮本・類従本「暗」、阪大本「碧暗」。

5 禪林風月詩中眼、襟宇清然思不群 阪大本・神宮本・類従本「平生習氣老猶在、燈下夜談先及文」。6 以下、阪大本「次韻賀臺州閣下令子威釋童佛地初歩、釋氏宮中聖小兒、天華雨感未曾時、祇因僧寶鎮家國、四海回風兩漢儀」、類従本「次韻賀薩州閣下令子威釋童佛地初歩、釋氏宮中聖小兒、天華雨感未曾時、祇因僧寶鎮家國、四海回風兩漢儀」。

扇面¹

三千紅粉一楊妃²、宴罷弄花香滿衣、惆悵開元貴遊後、牡丹亭畔夕陽微、老人躍馬意揚揚、觸着梅花袖裏香、楚國三千蹈珠客、爭如取履一張良、黃蘗紫葩朱實秋、鶉啼野色暮涼浮、鳥猶雙宿安眠枕、老矣天涯客獨愁、素服朱衣兩大官、畫船載酒此江干、得魚薄暮無如飲、風葦欲秋沙水寒、

1 阪大本・神宮本「牡丹畫楊妃」、類従本「牡丹畫楊妃」。2 楊 類従本「揚」。3 阪大本・神宮本・類従本、「老人」以下の三首を欠く。

竹外緋桃¹

誰某宮牆外、² 緋桃半映林、祇因被花嬾、³ 不奈此君心、

1 竹外緋桃 東大本では、題名を欠き、前首に続き、「扇面」の第五首となる。阪大本・神宮本・類従本「扇面竹外桃花」。2 牆 神宮本「垣」。
3 被花嬾 阪大本・神宮本・類従本「花嬾去」。

扇面¹

茅屋斜連脩竹林、遠山綠淺近山深、棹郎語客客先喜、濁酒村前一醉吟、²
海上三山一翠微、巖房深鎖是誰扉、過橋野客不行盡、³ 驚起沙禽別處飛、

1 扇面 東大本では、この二首は、直前の「扇面」四首に続いて第六首、第七首となる。2 村前 東大本・阪大本・神宮本・類従本「前村」。
3 行 東大本闕。

扇面畫、乃讚州太守源公之所描也、厥宗家頃有不測之慮、憑公以安焉、¹
洛下高官擲筆時、湘南風景畫中詩、因思山水出仁智、大厦雖傾一木支、

1 大 阪大本・神宮本・類従本「太」。

此繪也、源聰明公之戲筆也、謹題小詩而謾爲添蛇足於其側焉、竹豈可觸熱乎、蓋一時之所憤也、² 人其想之哉、

聰明四海冠諸公、戲筆通神竹一叢、炎日遮邊雖觸熱、夜來月出自清風、³

1 漫 類從本「漫」。2 憤 神宮本・類從本「憤」。3 東大本、小字「細川聰明公頃寓丹波」。

翠深禪伯、與予交遊尤厚者也、一東一西、聞厥無恙、互忻慰者六七年于今、庚子之夏、得得來而訪予於薩陽之新居、
歡抃之情、不言可知矣、於是作詩一章見示、不顧狂斐和高韻、²

心朋遠自海東來、筆寫新詩拂硯埃、萬轉雲山九州外、半間茅屋一庵開、音書雖報共無恙、別恨難除積作堆、莘野傳巖清
渭水、百年未必嘆遺才、

1 深 東大本「源」。2 韻 神宮本「員」。3 朋 神宮本「明」。4 萬 阪大本「方」。5 間 阪大本「開」。6 傳 類從本「傳」。

畫軸

處處溪山處處村、上方臺殿住巖根、數行落雁晚風惡、客繫歸舟易沒魂、¹

1 客繫歸舟易沒魂 阪大本・神宮本・類從本「欲問歸舟客斷魂」。

扇面¹

遠浦雲殘落雁聲、松間水綠又沙明、群飛並影秋風戾、不似思人客夜情、

寒實經霜葉已紅、何名幽草露吹叢、一書不帶數行雁、家在海東東復東、

1 東大本、小字「頃於薩州閣下讀般若、出扇數柄求詩經筵諸老、懷巖老及□□……□□各題詩」。

薩州閣下、頃斷酒肉而學清淨法、殊延僧侶而看洮汰之教、予預其數焉、散筵之後一日、乞暇而還于覺島之新居、閣下送予、到延慶精舍宿矣、主盟得翁老禪、見相待之厚也、聊効蓮社接陶醉漢之故事、將改酒戒、然閣下以不飲而強制之、予亦有愧於心、而不及舉盞焉、翁笑曰、是般若之點湯也、何妨之有耶、於是不得默、既盡醉矣、仍作是詩、謝閣下仁恕、且自解嘲云、

山徑泥深水漲川、追隨攀駕雨中天、高官不飲僧還醉、顛倒袈裟作枕眠、¹⁰

1 殊 阪大本闕。2 送 阪大本・神宮本・類從本「携」。3 矣 神宮本「乎」。4 禪 神宮本闕。5 亦 神宮本「又」。6 笑 東大本「自笑」。
7 恕 東大本「怒」。8 隨 東大本闕。9 攀 阪大本・類從本「舉」。10 東大本、小字「五月十二日」。

扇面

野服跨牛幽磻陰、¹馬群如簇極登臨、翁翁數到七人後、想見諸賢在竹林、

1 磻 神宮本・類從本「澗」。

哦松居士藤氏政秀公者、股肱乎薩府君、而任伊城之處守、有年于茲、不令而行焉、不言而信焉、蓋金玉而已之義也、¹
今將東觀光於上國、於戲乎遊從之廣者、必益識達之美耶、²寔可嘉尚焉、仍製里語一章、以壯厥行色、³
涼雨吹晴溽暑收、潮平風熱送行舟、⁴七年持節伊城守、萬里觀光京國遊、蘆荻洲前花未雪、梧桐井上葉先秋、歸期倒指兩
三月、一日加多奈別愁、⁵

1而 阪大本闕。2從 神宮本・類從本「蹤」。3益 阪大本「畫」。4耶 阪大本「哉」。5熱 東大本・阪大本・神宮本・類從本「熟」。6阪大本・神宮本・類從本「立秋日」。

哦松賢主人今將東遊、仍告別於同僚、以二十八顆之明珠、而傍及予、氣韻玲瓏、雅翫有餘、竟次高韻重呈祖帳之下、¹
人爲能詩襟宇清、千山萬水且吟行、歸時囊有明珠在、寄與衰翁好慰情、²
時遇太平家國清、關門不鎖旅人行、京官若問安邊策、魏闕雲端達下情、³

1主 東大本闕。2而 阪大本・神宮本・類從本闕。3次 神宮本・類從本「以」。4東大本、小字「代官人藤盛直」。

如練禪翁、一日投宿于官府之小院、適聞藤播牧之欲東遊、而速賦詩一章、以壯厥行、剩傍及管窺於予、不獲默、¹次
韻重贈藤公、

老禪吟盡夕陽樓、故爲高官賦遠遊、一曲離鸞情易感、碧梧葉動旅窗秋、
雲幾重中鐘一樓、名藍未得扣門遊、行人有約錦旋日、楓葉林巒共詠秋、

1 獲 神宮本「得」。

扇面¹

蒲萄映日露團團、²憶爲萱堂朝捧盤、欲引龍鬚上雲雨、架頭須插碧琅玕、
紫葩紅葉兩三莖、墟落秋風野鳥驚、憐爾天涯喚羣意、寒梢不穩暮光傾、

1 阪大本・神宮本・類從本「蒲萄」。2 蒲萄映日露團團 阪大本・神宮本・類從本「誰家蒲萄露團團」。

甫典藏飛錫、而東欲問某禪老於泉之古刹、漫作禪詩一章、壯其行、¹
禹穴巖高古梵宮、胸中祖月與禪風、明朝去欲問泉老、萬卷何如一印空、²

2 其 阪大本・神宮本・類從本「厥」。2 印空 阪大本「殳空」、神宮本・類從本「卽空」。

左金吾小野克盛、予之所宗、而舊交之尤厚者也、不面三四年于茲、適使來自山東、贈以佳篇二章、詞翰共妙、几席有照、其序曰、國都頃興仲尼之道、移東魯之風、寔傳者之妄也、剩於予之虛譽、慙汗惟夥焉、一亂之後、衰廢日加、而徒充官而已、縱雖齒於斯文、何益之有耶、攸念歸臥鄉曲、共樂餘年、何幸過之乎、公圖之、竟次嚴韻作三章、
江山千里舊知音、喜見書來情義深、他日休官我歸去、河南河北共君吟、¹

華牋筆落兩詩篇、書似張顥草聖傳、春坐花邊秋對月、非君誰記昔遊年、
老來誰讀聖賢篇、愧我虛名箕斗傳、鄉里兒童若相問、冷官無補奈衰年、³

1 東大本・阪大本、小字「代人」。神宮本・類從本は、第二首、第三首の詩題を「代人」とする。2 誰 阪大本・神宮本「難」。3 東大本・阪大本・神宮本・類從本、小字「季秋日代人」。

玉林禪師者、惠山永明祖之後裔、而叢林巨擘、我門耆英也、予稔厥芳聲、有年于茲、⁵庚子之秋、金錫西飛、而路極薩陽、忝訪予於海涯之新居、倒衣相迎、下榻共談、寔千歲之佳遇也、⁷刺製詩二章見示、雅然綺語、頓洗心目、何賜過之乎、⁸歛抃之餘、謹次高韻爲酬、

多年海外美名傳、一錫雲飛萬里天、胸次永明書百卷、清談白首慰生前、
僧梵聲中漁唱傳、蒼波萬頃漫遙天、新詩拜賜夜光璧、月亦南樓三五前、

1 林 東大本「泉」。2 祖 東大本闕。3 後 阪大本・神宮本「后」。4 林 神宮本闕。5 茲 神宮本・類從本「此」。6 忝訪 東大本「忝放訪」。7 歲 東大本・阪大本・神宮本「載」。8 之 阪大本・神宮本・類從本闕。9 漫 東大本・阪大本・神宮本・類從本「浸」。

是日、玉林翁見過、不厭新居蕭條、投宿去矣、翌日賦唐律一章爲賜、¹仍次其韻、²
光陰易擲老殘生、三見秋風滿塞城、一字茅廬四無壁、蕭條可忍客中情、

1 賜 東大本「贈」。2 韻 神宮本「員」。

玉林禪老留錫於陋居數日、求書者踵于門、而來往不絕、煩瀆惟夥矣、此夕適對榻到三更、談笑之間詠詩一章爲賜、予卒次韻、

六十州西天一垠、快披雲霧視青旻、紫陽仙伯風流盡、白首詩翁文采新、今夜傾懷領親語、明朝分手苦吟身、不須鐵鎖小門限、人爲求書來往頻、

松下采菊

籬菊秋深漸欲霜、蒼髯吹露洒黃裳、主人幽賞心安樂、風不度松花自香、¹
東籬把菊慰閑吟、翠蓋陰中暮色深、似寫淵明愛花意、松風緩鼓沒絃琴、

1 阪大本・神宮本・類從本は第二首として「茂松傾蓋綠亭亭、滿面清香酒半醒、風露衣寒小欄外、一簾秋色摘殘星」を、東大本は「茂松傾蓋綠亭亭、滿面清香酒半醒、風露衣寒□□□、一簾秋色摘殘星」を加え、「東籬…」は第三首となる。

隱人某出扇、求書松下采菊詩、仍應求、

松間采菊轉逍遙、花似隱君¹傲不朝、欲向蒼官問秦爵、功名又恐汚清標、

1 君 神宮本「居」。

辛丑元旦、數五五之字、賦一章、蓋隨例也、

鶯語風前花映人、一僧老矣物皆新、不須顏子愚知十、五五今年廿五春、

玉林翁使予題小景於便面、愚意與翁豈有他耶、共爲感而已、

江上春風霽景澄、山脚古木綠稜層、舊遊難續五雲寺、一棹漁舟添二僧、

1 愚 知覽本注記「寓イ」。東大本・阪大本・神宮本・類從本「寓」。2 脚 阪大本・類從本「脚」。

玉龍主盟和扇面詩重用韻¹

胸波萬頃鑑波澄、山現玉龍雲一層、非處我師仁愛地、無能六十奈村僧、

釋門神識佛圖澄、德望恰如臺九層、自束茅茨分法席、林翁海外一高僧、⁴

濁水不流何以澄、清泥日夜積成層、孤峰猶綠千江雪、起捲疎簾幾箇僧、

1 東大本・阪大本・神宮本・類從本「有序別錄」。2 波 東大本・神宮本・類從本「陂」、阪大本「坡」。3 鑑 知覽本注記「鎖イ」。4 東大本、小字「玉洞翁、爲玉林翁築新軒、號東東芝」。5 清 東大本・阪大本・神宮本「情」。6 泥 阪大本「昵」。

和孤雲禪伯寄溫嶽老之詩

蒼波白鳥島陰春、萬里家山隔海垠、異域相逢多少友、交情如舊兩三人、風傳暖信催紅杏、水泛晴光轉綠蘋、試問新居詩幾首、和篇勵拙効君顰、

1 勵 東大本・阪大本・神宮本・類從本「厲」。

擊節藤氏政秀公賀正之新詞¹云

一士才高列國賢、巧歌新調賀新年、山東乞降太平計、人坐春風醉綺筵、

1 詞 東大本・阪大本・神宮本・類從本「調」。

和卽緇郎春首詩¹

日得人時詩興新、含章梅落此佳辰、三年相見交如舊、不啻風流花帶春、

1 卽 東大本・阪大本・神宮本・類從本「印」。

去歲之冬、金禪人來自肥、帶一封蠶尾、披而覽之、一枝翁之手帖也、件件見示、忻慰無量、及春首、懈於回答、蓋以快便難逢也、今也有一僧而欲東歸、聊作返書爲贈、副以川八句二章、

去歲僧從桐瀨到、一封書信思千般、寓居欲改今何處、行李勿勞春尚寒、石北山川共嘗峻、海南風景獨憑欄、詩成元夕無燈火、新築蕭條借月看、

昔遊回首事空徂、不奈亂來風俗殊、人若讀書師孔孟、士寧輕命學孫吳、異鄉至樂閑爲足、故國歸心夢亦無、何日迎君拂

門徑、薜蘿四壁一庵臞、

1 便 神宮本「使」。2 歸 東大本闕。3 足 東大本・阪大本・神宮本・類從本「是」。4 拂 東大本・阪大本・神宮本・類從本「掃」。

肥陽芳俊童、作詩送金典藏、典藏曰、是童也、春秋十有一歲、聰明出于群輩、頃寄筆硯於一枝翁寓軒、螢窗雪案、誦詩學書、爲人所推賞矣、於戲乎不啻聞厥美名、親見是詞翰之妙焉、千里之外、實使予想其風采而已、何獲敢默、仍次韻、君今蚤歲語驚人、海外江山物色新、學得詩翁佳句法、一枝花是兩枝春、

1 詩學書 東大本は「詩學」を欠く。

月舟頃隨一枝翁、聞詩之道、見其¹近作、氣韻玲瓏、頗匪前日之所爲也、可喜賞哉²、仍次韻爲贈云、
燒燈時節落梅風、韶景九句過客同、好爲詩翁下懸榻、春花雪月雅談中、

1 其 東大本闕。2 可喜賞 東大本「嘉賞」、阪大本・神宮本「可喜賞」。

川八句一章、送¹睡禪人還于長門之故里、

春蓑裹夢淡生涯、有友四時逢必乖、名字題門雖識面、笑談分席至忘懷、三冬風雪小茅屋、萬里雲山兩草鞋、超海遙過赤城寺、梅花院落我書齋²、

1 曄 阪大本「曄」。2 齋 阪大本・神宮本「齊」。

孤雲欲往、出扇求詩、相告曰、此行也、將東過松橋、而且遊秋月之官府、畫趣略與言相似、仍賦是詩送行、

春花秋月思悠悠、人作紫陽名府遊、一抹青山雙白鷺、松江暮喚渡頭舟、

孤雲臨發、再出扇求詩、樹陰有亭、亭下薔薇、有不耐春之色、仍寫其小景、以攄離懷云、

吟上離亭西海涯、樹陰遮日暮光斜、留君難挽春風袂、露重薔薇無力花、

總官¹府限²部閣³下、前年之冬賜書曰、有客贈雲谷老禪所畫琴高列子二墨人者、願得一詩而書其側、予素不能詩、況仙

家者之流、怪跡異狀、寔非以淺智可贅論者、是以拒之辭之、近亦寄詩、以見督焉、嚴命之下、未遑寧處、蓋東遊之期在近

矣、若有刻楮而成者、自持去而親受閣⁴下刪潤耳、於是先次來詩韻、聊述其意、恕之不亦幸哉、

大家畫軸兩飛仙、期我東遊題一篇、風未吹衣魚不躍、弱波三萬里雲天、

1 官 東大本・阪大本・神宮本・類從本「管」。2 限 神宮本「隅」。3 部閣 東大本「部公閣」。阪大本・神宮本・類從本「閣」を「閣」に作る。4 閣 阪大本・神宮本・類從本「閣」。

彈州刺史源重清公、去歲之冬寄信、以佳章一篇、及春首、達海隅之地、披而覽之、詞高格老、寔使人雅翫不已耳、茲得飛廉之便、謾用來韻、答情義云、

空裡飛鴻水底魚、高官音問慰情餘、扣門憶昨相過處、花殿春風床有書、

窮困今同涸轍魚、一身離國十年餘、憑君欲借龍蛇勢、風卷飛雲入草書、

扇面

天至花時易作陰、春宵有月直千金、山長水遠客孤老、貪見朦朧欲了吟、

是日¹、大守過皇德精舍、予與玉林翁、隨官駕而爲遊、林翁有詩、次韻、

古寺花園幽礪陰、石橋橋畔綠苔深、禪意晝靜³樺花鳥⁴、似適閑僧賢守心、

1是 阪大本「此」。2花 東大本、「花」を「山」に改める。阪大本・神宮本「山」。3意 東大本、「窗」に改める。阪大本・神宮本・類從本「窗」。

4樺 東大本・神宮本「柳」。阪大本・類從本「柳」。5閑 東大本・阪大本・神宮本・類從本「問」。

匠作殿下携野僧兩三輩、作江畔尋花之遊、然無一枝可折、竟坐松下小亭、雅談終日、於是出扇求詩、仍寫其小景、爲呈云、
一醉斟春雙玉瓶、高官携客上江亭、有花可續今宵興、滿面松風酒半醒、

山寺惜春

茅廬¹深住小山阿、老矣惜春情更多²、明日殘花風與雨、城中佳客又如何、
風送飛紅吹作塵、一聲啼鴉恨頻頻、山家若有壽花術、莫慣人間易老春、
九十風光一夢間、東君無意奈衰顏、飛花吹盡急吹盡、春去山翁可出山、

1茅 阪大本「茆」。2情 神宮本・類從本「惜」。

題公府新亭¹

白玻璃水碧孱顏、沙鳥風帆几席間、只爲諸公來幕下、一亭鐘²秀九州山、

1 公 阪大本・神宮本・類從本「侯」。2 鐘 東大本・類從本「鍾」。

畫軸¹

佳客携琴晚出城、上方臺殿暮天晴、松風愈好山前路、認作十三徽²外聲、

1 畫軸 阪大本「題公畫軸」、神宮本・類從本「題畫軸」。2 徽 神宮本・類從本「微」、類從本傍注「徽歟」。

賦便面小景、以餞哦松居士豐城之行、

新墩紅映碧波中、一片蒲帆萬里風、去不經旬歸亦速、豐城咫¹尺海山東、

1 咫 東大本・阪大本・神宮本・類從本「只」。

題薩州閣下扇面¹

歸樵巖畔夕陽林、下擔看書惜寸陰、官暇有餘閑日月、不知一字是千金、

1 閣 阪大本・神宮本・類從本「閣」。2 擔 類從本「檐」。

扇面爲半聖居士題 居士爲禪門之撰

行人笠瘦夕陽坡、山繞樓臺佳景多、居士風流天下口、釣魚船上問如何、

送禪藏司¹省老師清虛²翁

塞垣草木葉飛初、人爲逢秋驚客居、去去平分風月好、乃翁胸次自清虛、

1 司 東大本・阪大本・神宮本・類從本「主」。2 虛 東大本「虎」

畫軸

坐客開襟詩興多、群峰玉立碧嵯峨、風帆潮落沙汀晚、水殿涼生幽磻阿、萬點浮萍魚未躍、參差烟樹鳥飛過、上方更有神靈地、曲徑登登似白蛇、

忠知藏者¹潮海之英²衲也、今夏掛錫於玉龍³、一日介同寮某公、來告曰、東歸在近矣、願得一語、以爲西遊歷記之資、仍作是詩、聊應其需云、

萍水相逢海西友、老情暫爾感離愁、數聲漁笛江上晚、一道星橋河漢秋、雲錫隨風飛下界、錦衣卜日赴中州、關門不鎖長城路、兩岸人家渡口舟、

1 忠知 東大本「忠公知」。2 潮 阪大本・神宮本・類從本「湖」。3 龍 阪大本・神宮本・類從本「山」。4 上 阪大本・神宮本「山」。

肥州廣福精舍、山號紫陽、裔典藏者其地人也、適隨自笑禪老、而遊于薩陽之地、一日訪予於海涯、袖出二十八顆明珠、蓋我友專嶽翁送公行色之一篇也、把玩之餘、漫次其韻、且謝來儀、³
紫陽名利素聞人、海外秋風吹客身、親炙二翁知幾日、書囊無底雅談新、⁵
語對東僧似故人、異鄉無友遠遊身、山成焦土隔江有、莫怪南方風物新、⁴

1 其 東大本・阪大本「某」。2 玩 東大本・阪大本・神宮本・類從本「翫」。3 儀 東大本・阪大本・神宮本・類從本「義」。4 有 東大本・阪大本・神宮本・類從本「在」。5 東大本「近向陽南邊底石燒上而與舊島相連」、阪大本「向島海底ノ石燒上而與舊島合」、神宮本・類從本「向島海底有石燒上而與舊島合」。

題大醫陳外郎杏林圖¹

虎溪流水市橋東、紅杏成林色映空、結子縱知家產足、飛花那忍五更風、

1 外郎 阪大本・神宮本・類從本「外郎公」。

肥陽廣棟主翁、遠飛錫於此地、¹適訪予於海涯之草堂、再也三也、來往取勞之餘見于詞、仍感其情、²次韻者二篇、蓋其一者答隈部公賜書之佳意云、

初面相逢各異鄉、老禪細意歎棲遑、一枝主杖兩三度、嶮似蜀山雲路長、

東指肥陽似故郷、再遊未逐又何遑、溪山佳處賢居士、每度書中情緒長、

1 錫於此地 東大本・阪大本・神宮本・類從本「錫而涉乎此地」。2 再也三也來往取勞之餘見于詞仍感其情 東大本・阪大本「雖初面、恰如故交、剩賦佳章一篇見示、披而覽之、年前再也三也、來往取勞之餘見于詞、仍感其情」、神宮本「草堂、雖初面、恰如故交、剩賦佳章一篇見千、披而覽之、年前再也三也、來往取勞之餘見于詞、仍感其情」、類從本「雖初面、恰如故交、剩賦佳章一篇見于、披而覽之、年前再也三也、來往取勞之餘見于詞、仍感其情」3 隈 神宮本「隅」。

便面¹

一夜雪飛三尺深、村村瓊樹與瑤林、行人地窄笠簷底、不上高樓奈我吟、

1 便 東大本・阪大本・神宮本・類從本「扇」。2 雪 類從本「雲」。

扇面¹

白波飄動碧孱顏、誰擘蓬萊拋世間、力掣²巨鼇齡祝鶴、春多禮部殿前山、³

1 東大本・阪大本「爲吉田禮部公」。2 掣 阪大本・神宮本・類從本「制」。3 神宮本・類從本「爲吉田禮部公 島隱漁唱 上卷終」。

(阪大本・神宮本・類從本、こゝで上卷終わり)